

願^{がん}

生^{しやう}

偈^げ

天親菩薩^{てんじんぼさつ}

『浄土論^{じやうどろん}

(無量寿経優婆提舍願生偈^{むりやうじゆきやううぱだいしやがんしやうげ})』より

「願生偈^{がんしやうげ}」は、七高僧^{しちこうそう}の第二祖^{だいにそ}であるインドの天親菩薩^{てんじんぼさつ}が浄土願生^{じやうどろんしやう}の心情^{しんじやう}を吐露^{とろ}した五言二十四行九十六句の詩である。

最初の四句^{さいしよ}において阿弥陀仏^{あみだぶつ}への皈依^{きえ}と浄土願生^{じやうどろんしやう}の思念^{しねん}が帰敬頌^{ききやうじゆ}として述べられ、続く四句^{つづ}では『浄土論^{じやうどろん}』を著^{あらわ}した意図^{いと}を明らかにしている。九十九句^{くじゅうじゅう}目までは浄土^{じやうど}の莊嚴相^{じやうごんそう}(国土莊嚴^{こくどしやうごん}十七種^{しちしゆ}、仏莊嚴^{ぶつじやうごん}八種^{はつしゆ}、菩薩莊嚴^{ぼさつじやうごん}四種^{ししゆ}の三嚴^{さんごん}二十九種^{にじゅうきゅうしゆ})を讃嘆^{さんたん}し、結びとして全ての衆生^{しゆじやう}とともに阿弥陀仏^{あみだぶつ}の浄土^{じやうど}に往生^{おう}することを願^{ねが}う回向^{けいこう}の意^いが示^{しめ}されている。

掲載^{けいさい}されている『浄土論^{じやうどろん}』は、具名^{ぐみやう}を『無量寿経^{むりやうじゆきやう}』という。『無量寿経^{むりやうじゆきやう}』とは、広く無量寿仏^{むりやうじゆぶつ}とその浄土^{じやうど}を説く經典^{きやうてん}のことと考えられる。「優婆提舍^{うぱだいしや}」とは、「經典の意^い味^みをすべての衆生^{しゆじやう}に分^わかりやすく近^{ちか}づけて説^とく」との意味^{いみ}がある。

七高僧^{しちこうそう}の第三祖^{だいにそ}である曇鸞大師^{どんらんだいし}が著^{あらわ}した『往生論^{おうじやうろん}』註^{ちゆう}』によって詳細^{しやうさい}な註釈^{ちゆうしやく}が加^くえられ、『浄土論^{じやうどろん}』と『往生論註^{おうじやうろんちゆう}』は、中国・日本^{ちゆうごくにほん}における浄土教^{じやうどきやう}展開^{てんかい}のうえに大きな役割^{やくわり}を果た^はしてきた。特に日本^{にほん}においては、浄土三部経^{じやうどさんぶきやう}(『仏説無量寿経^{ぶつせつむりやうじゆきやう}』『仏説観無量寿経^{ぶつせつくわんむりやうじゆきやう}』『仏説阿弥陀經^{ぶつせつあみだきやう}』)とともに、『三經一論^{さんきやういちろん}』と称^{しょう}して尊重^{そんじやう}されている。

昭和九年^{しやわくねん}以降^{いご}、本願寺派^{ほんがんじは}では勤行^{ごんぎやう}で依用^{えよう}されているが、大谷派^{おおたに}では中陰^{ちゆういん}などを中心^{ちゆうしん}に多く用^{もち}いる。

■
世尊我一心

同音

世尊（釈迦如来）よわたしは一心に

帰命尽十方

き みよう じん じつ ぽう

あらゆる世界をゆきわたって照らし

無礙光如来

む げ こう によ らい

自在に衆生を救いたもう阿弥陀如来に帰依して

願生安楽国

が ん しよう あん らっ こく

安楽国に生まれることを願う

我依修多羅

わたしは浄土三部経を依りどころとし

真実功德相

しん じつ く どうか そう

經典に示されてある真実功德の法に帰依して

説願偈総持

せつ がん げ そう じ

広博な経文を総撰したこの願生の偈を説き

与仏教相応

よ ぶつ きよう そう おう

仏の教えと相かない和合するものとしよう

観かん彼び世せ界かい相そう

かの世界（浄土）のありさまを観ずるに

勝しょう過が三さん界がい道どう

迷いの世界の因果の道理に超えすぐれている

究く竟きよう如に虚よこ空くう

なにもものにもさえぎられないことは虚空の如く

広こう大だい無む辺へん際ざい

広大であってきわほとりが無い

正しょう道どう大だい慈じ悲ひ

一如平等のきとりに契った大いなる慈悲は

出しゅつ世せ善ぜん根こん生しょう

煩惱なき清浄なる善根によって成就されている

浄じよう光こう明みよう満まん足ぞく

清らかな光明をそなえて満ちあふれることは

如に鏡きよう日にち月がつ輪りん

鏡や太陽 また月のようにである

備諸珍宝性

きとりを象徴するあらゆる宝からできていて

宝性功德草

いろいろな宝よりできている浄土の莊嚴功德は

具足妙莊嚴

ぐそくみょうしょうごん

柔軟左右旋

にゅうなんさうせん

すぐれた莊嚴（かざり）が完全にととのっている

草のように柔らかで左右にめぐる

無垢光炎熾

むくこうえんし

触者生勝樂

そくしゃしょうらく

煩惱の垢れをはなれた光が盛んに輝き

これに触れるものは浄らかな楽しみを生じる

明浄曜世間

みょうじょうようせんけん

過迦梅隣陀

かかせんりんだ

浄土のすべての飾りを照らしている

執着を起こさせる迦梅隣陀とは大きく異なる

宝ほう華け千せん万まん種じゅ

千万種に及ぶ種々の宝の華が

宮く殿でん諸しよ楼ろう閣かく

宮殿・楼閣という大きな建物からあらゆる世界を

弥み覆ふ池ち流る泉せん

池や泉や溪流に咲き乱れ散って覆っている

観かん十じつ方ぼう無む礙げ

なにもものにもさえぎられることがなく見渡せる

微み風ふう動どう華け葉よう

そよ風は花びらや葉に吹いてゆるがせ

雑ぞう樹じゅ異い光こう色しき

それぞれ異なった光を放つ樹々があり

交きよう錯しやく光こう乱らん転でん

それらが光り乱れ交わってきらきらと輝いている

宝ほう蘭らん遍へん因い遶によう

宝でできた垣がこれらの建物をぐるりととりまく

無む量りよう宝ほう交きよう絡らく

無量の宝をちりばめて編んだ絹の網が

羅ら網もう遍へん虚こ空くう

浄土の虚空にあまねくひろげられ覆い

種しゅ種じゅ鈴りよう発ほっ響こう

網についたさまざまな鈴は鳴り響くと同時に

雨う華け衣え莊しょう嚴ごん

時に応じて清浄なる華や衣を雨ふらせ

無む量りよう香こう普ふ薰くん

妙なる香りがあまねく薫ずる

仏ぶつ恵て明みよう浄じよう日にち

仏の智慧からあらわれている光明は太陽のごとく

宣せん吐と妙みよう法ほう音おん

素晴らしい真理の法を説き広める

除じよ世せ痴ち闇あん冥みよう

生きとし生けるものの煩惱の闇を除く

梵ぼん声しょう悟ご深じん遠のん

仏の深遠なるさとりのは声は

微み妙みよう聞もん十じつ方ぼう

遠く十方世界に響いて人々をさとりに至らせる

正しょう覺がく阿あ弥み陀だ

正覺の阿弥陀法王によって

法ほう王おう善ぜん住じゅう持じ

よくとどめたもち ささえられている

如に来らい淨じよう華け衆しゅ

淨土で阿弥陀如来をとりまく聖衆たちは

正しょう覺がく華け化け生しよう

阿弥陀如来のさとりのは華の中より生まれる

愛あい樂ぎよう仏ぶつ法ぼう味み

仏法を味わい楽しみを受け

禪ぜん三ざん昧まい為い食じき

禪定・三昧を食物とする

永よう離り身しん心じん悩のう

永久に身の苦しみや心の悩みから離れて

女にょ人にん及ぎ根こん欠けつ

差別されるような存在もない

受じゅ樂らく常じょう無む間けん

常に楽しみを受けて絶えることはない

二に乗じょう種しゅ不ふ生しょう

平等一味の世界である

大だい乗じょう善ぜん根こん界かい

衆しゅ生じょう所しよ願がん樂ぎょう

大慈悲の實踐によって完成した如來の世界は

衆生の求めるすべての願いを

等とう無む譏き嫌げん名みょう

譏られたり嫌われたりする名前はなく

一いつ切さい能のう満まん足ぞく

よく満足させることができる

故^こ我^が願^{がん}生^{しょう}彼^ひ

相^{そう}好^{ごう}光^{こう}一^{いち}尋^{じん}

こういうわけであるからわたしは

阿弥陀如来の放つ光明の範囲は仏の両手ほどあり

阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}国^{こく}

色^{しき}像^{ぞう}超^{ちよう}群^{ぐん}生^{じよう}

阿弥陀如来の浄土に生まれることを願う

そのおすがたはあらゆる者に超え勝れている

無^む量^{りよう}大^{だい}宝^{ほう}王^{おう}

如^に来^よ微^{らい}妙^み声^{みようしよう}

はかり知れない宝をもって飾られてある

如来の妙なる名号は

微^み妙^{みよう}浄^{じよう}華^け台^{だい}

梵^{ぼん}響^{こう}聞^{もん}十^{じつ}方^{ぼう}

微妙清浄なる蓮華台を仏の座とする

十方世界に響きわたる

同^{どう}地^じ水^{すい}火^か風^{ふう}

地・水・火・風や虚空と同じように

虚^こ空^{くう}無^む分^{ぶん}別^{べつ}

平等であって分別がない

天^{てん}人^{にん}不^ふ動^{どう}衆^{しゆ}

浄土の不退に住する聖衆は

清^{しょう}浄^{じよう}智^ち海^{かい}生^{しょう}

如来の清浄なる智慧の海から生まれる

如^に須^し弥^ゆ山^み王^{せん}

如来は須弥山の如くすぐれて

勝^{しょう}妙^{みよう}無^む過^か者^{しや}

これを超えるものがない

天^{てん}人^{にん}丈^{じよう}夫^ぶ衆^{しゆ}

天人や菩薩など浄土の聖衆は

恭^く敬^{ぎよう}遶^{によう}瞻^{せん}仰^{ごう}

みな如来を尊敬しこれを仰ぎみる

観かん 仏ぶつ 本ほん 願がん 力りき

阿弥陀如来の本願力を観ずるに

安あん 楽らつ 国こく 清しょう 浄じょう

浄土（安楽国）は浄らかで菩薩たちは

遇ぐ 無む 空く 過か 者しゃ

常じょう 転てん 無む 垢く 輪りん

この仏にお遇いしてむなしく過ぎるものはなく

つねに煩惱の穢れのない清浄真実の法を説く

能の 令り 速よう 満そく 足まん

化け 仏ぶつ 菩ぼ 薩さつ 日にち

みなよく速やかに満足させていたたく

太陽が空から地上に届くように菩薩の応化身も

功く 徳どく 大だい 宝ほう 海かい

如に 須よ 弥しゅ 住み 持じゅう

海のごとき大きなこの上ない功徳を

須弥山の如く不動で浄土を動かずして教化して救う

無^む垢^く莊^{しょう}嚴^{ごん}光^{こう}

煩惱の穢れのない美しい光明の輝きは

一^{いち}念^{ねん}及^{ぎゅう}一^{いち}時^じ

一瞬・同時のうちに

普^ふ照^{しょう}諸^{しよ}仏^{ぶつ}会^て

あまねく十方の世界に往って諸仏を供養し

利^り益^{やく}諸^{しよ}群^{ぐん}生^{じよう}

またあらゆる衆生を利益する

雨^う天^{てん}樂^{がっ}華^け衣^え

空中から淨らかな音楽・華・衣服

妙^{みよう}香^{こう}等^{とう}供^く養^{よう}

妙なる香などの雨を降らして仏を供養し

讚^{さん}諸^{しよ}仏^{ぶつ}功^く徳^{どく}

十方諸仏の功徳を讃嘆するのに

無^む有^う分^{ふん}別^{べつ}心^{しん}

平等・無執着でわけへだてるような心がない

何^が等^{とう}世^せ界^{かい}無^む

どのような世界であっても

我^が作^さ論^{ろん}説^せ偈^げ

わたしはこの願生の偈を作って

仏^ぶ法^{ぽう}功^く徳^{どく}宝^{ほう}

願^{がん}見^{けん}弥^み陀^だ仏^ぶ

この功德の宝である仏法がないならば ユルク

阿弥陀如来に帰依をして

我^が願^{がん}皆^{かい}往^{おう}生^{じよう}

普^ふ共^ぐ諸^{しよ}衆^{しゆ}生^{じよう}

私は人びとがみな往生するように願い

あらゆる衆生と共に

示^じ仏^ぶ法^{ぽう}如^に仏^ぶ

往^{おう}生^{じよう}安^{あん}樂^ら国^{こく}

仏さまのように仏法を示します

安樂国に往生しよう